

文化庁委託事業
「平成 26 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

平成 26 年度
江戸系あやつり人形 結城座
人形遣い体験入門研修事業 報告書



開講にあたって

結城座はお蔭様で、昨年創立 380 周年を迎えました。

約四世紀という長い時の流れの中で、この“江戸糸あやつり人形”という日本人独特の感性が生み出した繊細かつ、しなやかな強さを持った芸能は、多くの民衆に愛され続けてきました。沢山の人形遣いたちが芸を磨き、しのぎを削り合いながら試行錯誤を重ね、人形の仕組みや技術も熟成されながら、現在の私達の時代へと伝えられてきたのです。

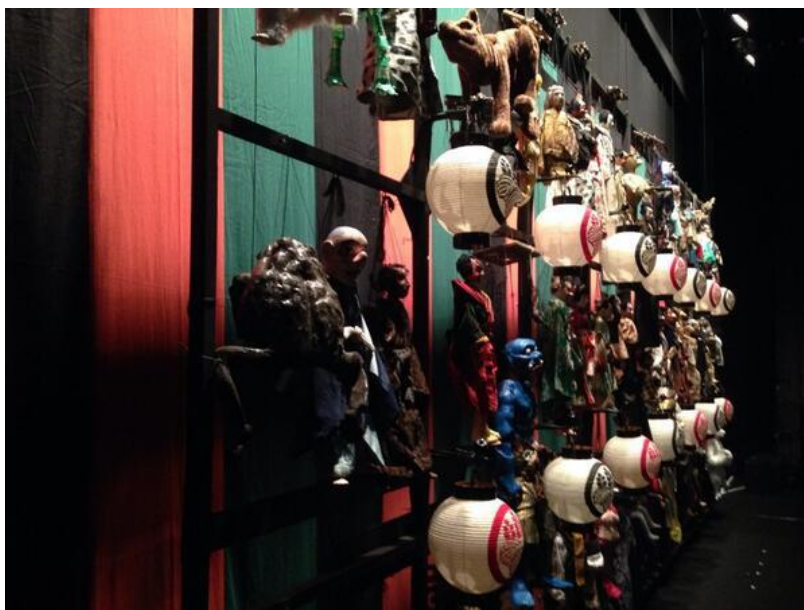
今私達が思う事は、この小さな一座がなんと多くの人達に支えられ存在しているかという驚きと喜び、そして四世紀にわたり人々を強く魅きつけ、その心を豊かにして、人と人との結び付けてきた“江戸糸あやつり人形”の持つ素晴らしい力です。

結城座は、この“江戸糸あやつり”の絆を更に未来へとつなげてゆく為、平成23年度より文化庁の委託を受けて、小金井の稽古場での人形遣い入門塾をスタートさせました。優れた後継者を見出し、同時に多くの人々にその魅力を実体験して頂きたいと考え取り組んだ入門塾も、今回で第四回目となりました。

今年度も又、私達の活動にご賛同下さる各界の実力者の方々が特別講師を勤めて下さり、皆様ご多忙な中、塾生に手とり足とりの熱心な講座を行って下さいました。通常ではとても体験できない素晴らしい授業に、塾生達の人形への意欲もより一層深まりました。

こうして各界の皆様のお力添えにより、今年度も大変充実した入門塾になりました事、座員一同心より御礼申し上げます。今後も未来に向けてこの“江戸糸あやつり人形”という日本の貴重な芸能を伝える為、より一層努力をして参りたいと思います。

結城座



目次

開講にあたって	1
全体の講義概要	3
人形実技（結城座 人形遣い一同）	4 ～ 1 1
能の発声法と所作（津村禮次郎 先生）	1 2 ～ 1 3
古典の台詞（澤村藤十郎 先生）	1 4
鳴物（田中傳次郎 先生）	1 5
日本舞踊（西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生）	1 6
演劇史（大笹吉雄 先生）	1 7
芝居作り（加藤直 先生）	1 8
人形芝居概要（田中純 先生）	1 9
受講生のアンケートより	2 0
人形実技の講義を終えて（結城孫三郎 結城千恵）	2 1

全体の講義概要

●実施期間 平成26年5月～平成27年3月

●授業日 月・水・土曜日

(人形実技120分＝1コマ その他の特別講義90～120分＝1コマ)

●参加者数 8名 (女性8名／20代 1名 40代 1名 50代2名
60代 4名)

●講座一覧

科目	講師	授業数
人形実技 (実習を含む)	結城座人形遣い一同	110コマ
能の発声法と所作	津村禮次郎	6コマ
古典の台詞	澤村藤十郎	2コマ
鳴物	田中傳次郎	2コマ
日本舞踊	西川右近 西川鯉之祐 西川貴美子	6コマ
演劇史	大笹吉雄	1コマ
芝居作り	加藤直	5コマ
人形芝居概要	田中純	2コマ

●実習

平成26年5月 「半七捕物帳異聞」(於 東京芸術劇場シアターウエスト)
稽古見学

平成26年10月 「オールドリフレイン」(於 座・高円寺2)
ゲネプロ見学 裏方

平成26年12月 「芝浜の革財布」(於 かめありリリオホール) 公演見学
「古典劇場 証城寺の狸囃子 釣女 寿獅子」
(於 江戸東京博物館ホール) 公演見学

平成27年3月 成果発表会「伽羅先代萩」(於 結城座稽古場) 出演 裏方

人形実技 (110 コマ)

講師：結城座人形遣い一同

●開講式

5月17日(土)、開講式を執り行う。アットホームな雰囲気の中、座長・結城孫三郎、結城千恵の挨拶の後、それぞれの自己紹介。これから来年3月までの長丁場を共にする面々。

毎回授業の最初と最後は挨拶をする。正しい日本のお辞儀の仕方を教わり、早速初めの挨拶をして、初めての人形実技の授業に入る。結城座の歴史、人形の仕組みや扱い方の解説を受け、各々の身長に合った、遣い易い長さの人形を持つ。一人で一体の人形。人形の操作盤である「手板」の持ち方、人形を遣う姿勢を教わる。手板を水平に持つこと、人形の足の裏がしっかりと地面についていると感ずることが、人形を遣う第一歩である。また、人形を人形掛けに正しく掛ける、人形掛けから人形を取る、ということも教わる。初めてのことばかりで気持ちも身体も緊張気味だが、少しずつ身体に染み付いていくだろう。



手板を水平にして人形を立たせる
手板を持つ左手で人形の足の裏を感じる
遣い手の肘は身体から離し、人形の手板と遣い手の胸の間に
広く空間を開ける



それぞれの自己紹介も個性があって面白い

●5、6月(人形遣いのフォーム、足踏み、足踏み前進、色々な糸の位置を覚える)

手板を水平に持ち、地面に人形を立たせることから始めて、次に膝の糸を遣って足踏みすることを学ぶ。右の膝の糸は、手板のたたらいという仕組みに繋がっていて、まっすぐ上下に動かすと、左右の膝の糸を同時に遣うことができる。膝の糸を上下させると、人形が足踏みをする。左手で手板を持ち、右手で膝の糸やその他の糸を遣うのだが、右手で遣おうとしている糸やその他のことに気を取られると、左手で持っている手板のことがおろそかになってしまう。手板を水平に持ち続けることを常に心がけなければいけない。また、足踏みをさせると、初めは人

形が浮いてしまったり、沈んでしまったりする。人形の足がちょうどよく地面に着く位置で遣い続けられるように、人形を通して地面を感じられるように何度も稽古を重ねる。

身体の癖、立ち方の癖などは一人一人異なるので、人形を遣う姿勢・フォームは各個人に合わせて何度も指導される。骨盤を立て、膝を緩め、重心はつま先の方へかける。上半身は力を抜き、手板や糸を持つ際は力まず、自然な流れの中で美しく持つ。

足踏みの次は、足踏みで人形を前進させることを学ぶ。その場から動かない足踏みと違い、前進するためには人形遣いも前に進まなければいけない。前に進む人形の後をついていくように人形遣いも進むのだが、人形と人形遣いの距離やスピードのバランスをとることが難しい。また、人形遣いの身体の揺れや身体の運びは、人形に大きな影響を及ぼす。時には人形を持たずに前に進む稽古もする。膝をゆるめ、足は自由に動かすが、腰の位置は変えずに進む。重心は、前に進むときも常に前にかける。

並行して、手板のどこに何の糸が付いているのか、どのようにして遣うのかを学ぶ。



人形を足踏みさせる



足踏みで前進させる



時には人形を持たずに稽古
腰の高さは一定に、左右に腰を振らない



糸の持ち方を教わる
指の腹で糸を持ち、使わない指は手のひらにしまう。
他の糸に指をひっかけないように、また、美しく見えるように持つ。

手板についているタコ糸のことを「よび糸」と呼ぶ
手板の何処に何の糸がついていて
どのように遣うのかを覚える
遣いたい糸は「よび糸」からとって遣うのが基本



●7月（重心を意識する、息を合わせる、声を出す）

人形の重心を意識した稽古を始める。右足を上げた時に人形の重心はどこにくるのか。人間であれば意識せずとも、全ての動きに必然の重心移動があるが、人形は遣い手が明確にそれを感じなければならない。また、人間には筋肉があるが人形にはない。ないものは人形遣いが補っていかなければならない。人形の体重や重心を無視して遣うと、人形の動きは超自然的なものとなり、説得力を失う。人形を遣うということは、人間が行うひとつひとつの動きを、改めて認識していくことでもある。

授業の中では、人形芝居をする上で非常に重要な、息を合わせることも学ぶ。一人で稽古していたのでは絶対に出来ない、授業に通っているからこそ出来る稽古である。相手と息を合わせる、相手の息をもらう、相手に伝えることを、色々なシチュエーションを設定して学ぶ。

また、通ってくる塾生たちにとって、いつも大きな課題となる、声を出す稽古も行う。毎回の授業では、一度も声を出さずにその日の授業が終わることはまずない。数を数えたり、“しりとり”をしたり、笑ったり、怒ったり、ひたすら大きな声を出したり、人間の様々な感情を声にのせたりしながら人形を遣う。声を出すことも難しいが、声を出しながら人形を遣うというのは本当に難しい。



左) 人形でジャンプする稽古。まず、人間がジャンプしようとするどんな身体の動きになるのか考える自分の身体を動かして確認する

右) 人形でジャンプ。飛ぶときの「ふんばり」も大事だが「着地」も大事
どのように飛んだら、どのくらい高く、どのくらいの距離を、どのくらいの速さで飛べるのか
ジャンプするのは人形ですから、つられて人形遣いも同じようにジャンプしたら…人形はぐちゃぐちゃ
人形遣いは人形を遣いながら常にどこか冷静な部分を持っている



人形の足を針金で繋いで、二人三脚に挑戦
隣の人と足の高さ、進む距離、足踏みのリズムを合わせないとなかなか上手く進めない

息を合わせて長い距離を進めるようになると、2人から3人、4人、5人と繋ぐ人形の数を増やしていく
小学校の運動会のように夢中になれる楽しい稽古



台に登って降りる稽古
 右足を台にかけ→登る！（体重移動に注意）→体勢を整え→左足から降りる
 登る前に台を認識したり、降りる時は足元に注意したり、という前後のプロセスにも気を使って稽古する



声を出す稽古。人形を通してお客様に伝わる声を出せるよう、色々模索しながら稽古

●8月（小走り、体重移動）

先月までの内容は引き続き稽古しながら、色々な場面を想定した稽古をしていく。また、膝や手の糸だけでなく、つま先や腰の糸を遣うことも織り交ぜながら授業を進める。手板を持っている左手で操作する、頭を左右に動かす糸や、顎を前に出す糸など、非常に難しい糸を遣うことにも慣れるよう少しずつ稽古を始める。

また、小走りの稽古も始まる。スピードが速くなると、慌てたり力んだりしてしまい、手板を水平に保つことも難しくなる。人形と人形遣いの関係を崩さないよう気をつけながら遣う。



前進して右足を出した状態で止まる稽古
 ただ動きを止めるだけでは人形は止まらない。皆さん力の加減が難しいのか、勢いがありすぎるのか、止まるだけなのに意外と難しく四苦八苦。



- 左)「倒れる」稽古。簡単そうに思えるが、ただの「物」として倒れるのではなく、何かに対する反応、もしくは意思を持って倒れることが課題
- 中) 人形達で輪を作って、息を合わせながら一人ずつパタンパタンとリズムよく倒れていく。人形でタイミングを合わせようとするより難しくなる。うつ伏せに倒れたり
- 右) 仰向けに倒れたり

●9～11 月（片膝をつく、座る、頭を動かす、芝居を作る稽古）

秋になると、外部講師による特別講義が続々と始まった。人形実技の授業の頻度は低くなるが、基本の人形遣いのフォームに立ち返りつつ、色々な稽古を行った。



- 今まで習った動きを使って、一人一人芝居を作る稽古。
- 左) 舞台としてセットされた道具。ついでに、木の箱、椅子。これらは必ず使うことが条件。それ以外は自由。台詞を言っても構わない。
- 下左) 稽古した台の昇り降り
- 下中) 人間サイズの椅子に人形が座るためにジャンプしたり
- 下右) 孫三郎のお手本
それぞれが個性的なお芝居。最後に孫三郎の講評。



●12、1 月（座る、お辞儀する、人形に糸を付ける）

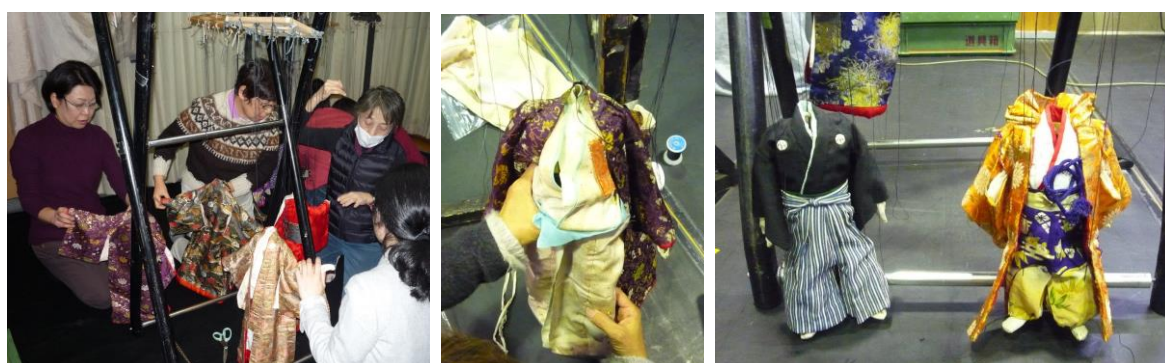
成果発表会の日程と演目が決まった。演目は「伽羅先代萩」の御殿の場で、劇中で何度もお辞儀をする。「座る」ことや「お辞儀をする」ことは、一度に何本もの糸を持って、同時に手板も上手く操らなければいけないので、とても難しい。何度も稽古するが、中々思い通りに操れない塾生が多い。手板を持つ左手と糸を持つ右手から伝わる感覚と、人形を見る自分の目で、自分の人形がどのような格好をしているのか、想像できるようになるには時間がかかる。

また、発表会で自分が遣う人形に衣裳を着せ、糸を付けることも学んだ。糸あやつり人形な

ので、糸は衣裳を通っているのですが、簡単に着替えさせることはできない。人形に衣裳を着せる（＝人形に糸を付ける）ことは、それによって人形の遣い易さが大きく変わるため、人形遣いにとっては非常に重要な作業である。



左) 座る
中) お辞儀する
右) お辞儀をするときは何本もの糸を同時に遣う



左) 人形をかけて、まずはじめに肩の糸から決めていく。上半身の糸を付けて、次に下半身の糸を付ける
中) 着せ方に遣い易さも左右されるので、微妙な調整が必要
右) 糸の付いた人形。最後に頭を上げて、人形の完成

●2、3 月（発表会に向けての稽古、舞台作り）

成果発表会に向けての稽古が本格的に始まる。立ち稽古に入る前の台詞の稽古にも時間をかけた。まずは大きな声を出すこと、そして古典独特の言い回し、リズム、発音を大切にすること、そしてなにより役の感情を持って台詞を言うことを稽古する。

成果発表会の一ヶ月前頃から立ち稽古に入った。これまでの人形稽古では男の人形を遣っていたが、発表会で遣うのはほとんどが女の人形。女の人形は足首から先がなく、胴の作りも男とは異なるため、歩き方や座り方など、女の人形の遣い方を改めて学ぶ。芝居の中では、これまで学んできた基本の糸だけではなく、打ち掛けを持つ糸や、手を必要なところへ引き付ける糸など、色々な糸を遣わなければならない。また、義太夫の語りに合わせて芝居をすることも大きな課題だった。役の感情やひとつずつの動きの意味、方向性、関係性、間やテンポなど細かく指導が入る。短期間でたくさんの新しいことを学び、一度に色々なところへ気を配らないといけないため、これまで学んできた基本が疎かになってしまうことも多かった。しかし稽古を重ねていくうち、少しずつ全体の流れがよくなったり、息が合うこともあった。新しく教わったことを全て消化することは難しかっただろうが、お客様に見ていただくうえで最終的に重要だったのは、舞台の上では人形を遣っている自分ではなく、遣っている人形の役として存在することだったのではないかな。

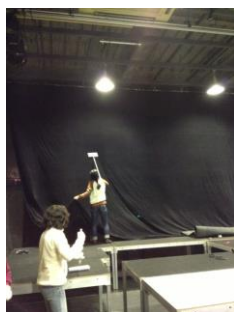


左・中) 台詞の稽古の様子 右) 立ち稽古の様子。ひとつひとつの動きを丁寧に指導



懐剣について説明

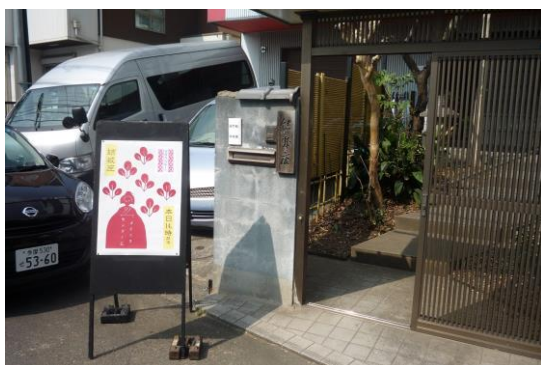
倒れている千松を八汐が抱きかかえて運ぶ



舞台作りの様子
左) 基礎舞台の組み立て
中) 台を設置
右) 大黒幕を吊る

●成果発表会「伽羅先代萩」より御殿の場

3月15日、成果発表会が行われた。塾生からの希望で、当日も通し稽古を行った。人形や小道具を確認し、舞台、玄関、廊下を掃除して、お客様を迎える準備を整える。



左) 結城座の前と交差点のところに立て看板を設置してご案内
上左) 塾生による手作りパンフレットとアンケート用紙。パンフレットはなんと10ページものボリューム。あらすじから塾生のコメントまで充実した内容
上右) たくさんのお客様にお越しいただいた

塾生たちが招いたお客様で客席はほぼ満席であった。孫三郎の挨拶の後、いよいよ本番。幕開きの鳴物と柝頭で定式幕が開く。上演時間は25分ほど。塾生たちは、1度きりの本番を、緊張しながらもやりきった。お客様を前にするとやはり何かが変わるのか、前日や当日のリハーサルよりも、本番が一番集中して、声もよく出ていた。お客様を前にして舞台を踏むという経験は、やはりかけがえのないものである。



冒頭より



千松と八汐



政岡と栄御前



最後の口上



修了証書を受け取る



打ち上げ

●その他

結城座自主公演の稽古見学や、劇場でのゲネプロ見学、公演見学などを実施



小金井市民交流センターで行われた、孫三郎の講演聴講

特別講義 能の発声法と所作（6コマ） 講師：津村禮次郎 先生

● 講義を終えて

江戸時代からの伝統芸能である結城座の「糸あやつり人形」は独自の訓練メソッドは確立され、今日に伝えられているのは間違いない。その中で同じ伝統芸能である能楽の講義、体験はどれほどの意味があるのかと、講師を引き受ける折に考えさせられた。現代演劇や西欧のテクニックに基づく現代舞踊のように異質な分野への能の体験やレクチャーは、異分野異次元からの刺激、大きな効果や意味や成果が期待されるところである。私自身もそのことは過去に幾度となく経験していることである。この講座を受けるにあたってまず私がある種の戸惑いを持っていた点である。

人形を操る者は人形をあやつると共に、その人形になり変ってセリフを言いアクションを行い劇を演じる。それは能役者が能面という仮面をまとい、あたかも人形を操る如く、自分の身体をコントロールし謡いセリフをいうのと似ている。古典芸能ではあるが歌舞伎とはまったく異なり、ましてや一般の演劇とは大きな違いである。生身に仮面をつけた身体をあやつる技術、精神性が必要である。その意識の在り様はある意味では、人形遣いとよく似ている。文楽の人形遣いは謡うことはなく、浄瑠璃の大夫の語りにのせて人形を操るのみである。

私は結城座のプロ団員のワークショップは経験があるが、彼らは実際の舞台活動でそういったことを既に体験済みである。今回は結城座に関心を持つアマチュアの方々を対象にした講習である。私自身そういったことを踏まえつつ講習を重ねることが必要であろうと考えた。幸い世阿弥の論書には「風姿花傳」や「二曲三体」など、技、演技と心の関係性、在り様を説いている。

能の基本技である「謡（うたい）」と「舞」を同等に優先順位をつけずに、並行して実習すること。また日本の芸能の中で能の存在位置、その成り立ちの複雑性と他の芸能への影響などの歴史的なことも教材に取り上げ、芸能が単独ではなく互いに絡み合いつつ成長してきたことなどを学んでもらった。それは古典を単に古典として尊重し存在させるのではなく未来へ繋げていく作業の基本であろうと思うからであり、現代の能楽界の新しい活動、他のジャンルの舞台芸術とのコラボレーションの事例なども映像を交え紹介した。

最終的には学んで頂いた受講者の方々が、単に技術の修練に終わらず、古典芸能をより深く具体的に体験して、日本の文化というものを理解して頂き、かつ誇りに思ってもらいたいと念願している。（津村禮次郎）

● 講義概要

第一回

日本の伝統芸能の歴史から、能の成り立ち、位置づけについてお話を伺う。後半は「高砂」の謡を、詩の解説と共に指導していただいた。

第二回

「鶴亀」を教材に、能の謡や囃子のリズムについて学ぶ。ヤアの間、ヤヲの間の違いや、大乗りについて、一拍一字のリズムについてなど、能独特のリズムに挑戦した。謡の後は、同じ場面の仕舞の型付け（簡単な装束で楽曲なしで踊る）をして頂き、「さしこみ、ひらき、しぼり、すみとり」などの型を丁寧に指導していただいた。

第三回

「羽衣」のDVDを鑑賞しながら、能がどのように作られているか。シテ、ワキの役割、能面の種類、能舞台について解説していただく。その後は「鶴亀」の仕舞の型付けを、扇子の持ち方から指導していただいた。

第四回

能は、四座一流があり、それぞれ特徴が違うというお話から、能舞台とオペラ座の共通点についてお話を伺った。その後は、「高砂」の謡をシテと地謡に分かれて、稽古していただいた。

第五回

能の小物や作り物について、演目の種類と特徴、行う順番についてお話を伺ったあと、「高砂」の謡と所作を指導していただいた。

第六回

先生の自宅稽古場（能舞台になっている）をお借りして「高砂」の謡と所作を稽古した。謡では“見台”の組み立て方を教えていただき使わせて頂いた。シテと地謡の謡い方の違い、扇子を持つタイミング、謡い出しは特に呼吸を合わせることを指導していただく。所作の後は、塾生の地謡に合わせて先生がシテを舞ってくださった。



特別講義 古典の台詞（2コマ）

講師：澤村藤十郎 先生

● 講義を終えて

二回のおけいこを終えて、生徒さんが一生懸命で、前回同様受け留め方がすごく良くて、嬉しかったです。おけいこの必要を感じました。（澤村藤十郎）

● 講義概要

「野崎村」をテキストとして、古典の台詞の稽古をつけて頂いた。

作品や役に関する解説や先生のお手本を聞きながら、台詞のリズムを大切にしながら台詞を言うことを目標に取り組んだ。義太夫なまりは身体に入らないと難しいので、とにかく義太夫節を知ることが大切だということを教えていただき、配役を交代しながら台詞を声に出して読んだ。感情を込めつつ台詞のリズムを壊さないように、人の芝居の邪魔にならないように台詞を読むことの大切さも教えて頂いた。

また、台詞の稽古の中に、古典や歌舞伎に関するお話を挟んでくださり、塾生は熱心に聞き入っていた。



● 講義を終えて

歌舞伎音楽の講師として本年度もお招きいただきありがとうございました。

私の授業はまず歌舞伎音楽の歴史や、後世に繋げていく伝承の難しさをお話した後、実技として大太鼓を使った自然描写・心理描写・怪奇現象の音を学んでいただき、そこから生まれる“表現”についても話しさせていただきました。

最初は撥の打ち方に苦労されていましたが、みなさん熱心に練習され、“水の音”や“風の音”は楽しんで打っておられました。“ドロドロ”や“雨の音”など難しい手法になると、見る事や聞く事だけでは出来ない世界を体験していただけたと思っています。

稽古や舞台は勿論日々の積み重ねです。ここに“表現力”と“想像力”が加われば、新しい広がりが生まれると思います。また歌舞伎をご覧になるときに、音を意識して頂き、今回の講義を思い出していただければと思います。（田中傳次郎）

● 講義概要

第一回

囃子方とはどんな仕事か、どのような楽器を使って情景を表すかをお話頂いた。数ある表現の中から今回は「自然の音」、「時を知らせる音」、「心理描写」、「超常現象」について教えて頂いた。そして実際に大太鼓を打たせて頂いた。まずは「水の音」。基本はドンドンドン・・・と規則的な音だが、先生はその音に常に+1を考えてくださいという。その水はどこにあるのか？時間は？心境は？など、音にそれらを加えて表現する。塾生も指導を受けながら「水の音」に挑戦したが、まず規則的に音を出すことも出来ず、表現するための基礎の難しさを痛感した。次に「風の音」。先生がお手本として、泥棒と泥棒を追う男の情景をイメージして「風の音」を打ってくださった。風音だけで実に様々な場面を表現することができる。また、それはつまり役の心境や状況によって変化するということで、お芝居の息にあわせて打つという事を教わった。

第二回

前回の続きで塾生が「風の音」に挑戦した。情景を思い浮かべながら、二本の撥で打つことが非常に難しく、利き手ではない方の撥が特に上手く動かせない。先生の、「手本を見て真似、上手いかなかった手本とのズレを埋めていく事が、表現を、芸を身につける事である。芸は職人の世界」という言葉をしっかりと胸に刻む。他に、「山おろし」「波の音」「雨の音」「雪の音」などを教えて頂く。「雪の音」は関東と関西でリズムが違い、演目や場面によって使い分ける。塾生達は、鳴物について知り、体感することで、観客として見る目も変わったようだ。また、自分たちの発表会での「表現」に対する意識も向上した。



特別講義 日本舞踊（6コマ）

講師：西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生

● 講義を終えて

人形でお芝居をする上で必要なものの一つとして、日本舞踊を学んで頂きました。踊りが上手くなるためではなく、良い形や心というものを、糸を通して人形に伝えるために、役立ててほしいという気持ちで授業にあたりました。摺り足やお辞儀、立つ・座するという基本的なことから始まり、日本舞踊の美しく無駄のない所作は、舞台上で必ず活きると思います。初めは振り付け通りに踊ろうと、それだけで精一杯だったかもしれませんが、踊る役によって「気持ちの入れ方」「身体のかい方」「間の取り方」が変わることを感じていただけたと思います。そのようなことは、人形でお芝居をされる際にも同じことだと思いますので、役立てて頂いて、人形のお稽古に励んでいただければと思います。（西川鯉之祐）

● 講義概要

女の踊りとして「京の四季」を、男の踊りとして「五万石」を指導して頂いた。ひとつひとつの振り付けの意味も丁寧に教えていただいたので、曲の世界をより理解することが出来た。自分の身体だが、自分がどのように見えているかはなかなか分からない。ほんの少しの角度の差で全く違って見えてくる。緊張して険しい顔になってしまう塾生たちに対して、楽しく踊ってください、という先生の言葉。先生方の美しい所作をお手本に、塾生達は毎回一生懸命真似ることに努めた。

第一回 所作の基本、扇子の扱い方を学ぶ「京の四季」

第二回 お辞儀の仕方、首振り、向きの変え方、おすべり等を丁寧に復習「京の四季」

第三回 かなめ返しの稽古「京の四季」

第四回 「京の四季」のおさらい、刀の持ち方の稽古、かなめ返しの稽古、男おどりの基本を学ぶ 「五万石」

第五回 扇子を使った動きの稽古、ひざの割り方「五万石」「京の四季」

第六回 「京の四季」「五万石」お浚い



特別講義 演劇史 (1コマ)

講師：大笹吉雄 先生

● 講義を終えて

昨年につづいての担当だから、何人かは顔なじみだった。だから同じ話を繰り返すにはいけない。そこで考えたのが、国家と現代演劇、新劇との関わりという問題に絞っての話をするこ
とだった。つまり、明治維新以後、1990年に日本芸術文化振興会が発足するまでの概略で
ある。

こういう話を耳にするのは全員がはじめてだったらしく、興味津々という感じで話について
来た。芸術家といえどもカスミを食って生きているわけではないのだから、いざ実際活動に関
わるとなると切実な問題だけに、知って良かった、役に立ったという感想をもらす人が多かつ
た。話し手としても抽象的な問題と具体的な話題、そのバランスを工夫することの大事さを改
めて感じさせられた。(大笹吉雄)

● 講義概要

文化助成をキーワードに日本の現代演劇の流れを学んだ。

オペラや演劇、ダンスのちらしを例として取り上げ、ちらしに記載された文化助成の名称を
発見しあってはそれぞれ異なる文化助成の目的を教えて頂き、日本の舞台芸術の水準を引き上
げる可能性を持つ作品への助成、舞台芸術を広めるために金額は小さくても多くの作品に出さ
れる助成があること、作品ではなく演劇団体や芸術家個人そのものに出される助成など、文化
助成にも様々な種類がある事を知った。

その他にも演劇で利益をあげる商業演劇、戦後の歌舞伎役者たちが映画の世界に移って行っ
た背景や劇団と劇場の関わりにおける日本とヨーロッパの違いなど、劇場と演劇と観客と国の
関係の変遷を様々な例をあげて鮮やかに解説して頂いた。

文化助成という観点から演劇の流れをみると、いかに文化助成は経済状況と比例しているの
かということがわかった。

不景気の今、どれだけ多くの対象に『何か』を与えることができるのか、という公共性を考
えた時、芸術家が社会とどう繋がって行くか、文化助成で作る舞台芸術の公共性とは何か、ま
た演劇の未来を考える時、社会の中核を担う世代の観客をどのように増やして行くかという大
きな課題が示された講義であった。



特別講義 芝居作り（5コマ）

講師：加藤直 先生

● 講義を終えて

「現代の演劇」について考えることがボクに課せられた内容だと思いますが、好奇心旺盛で飽くことを知らない受講生のために、今年は「今劇場とは何か？」と「語りたい物語とは？」という設問を置き、自らの声や身体を使って近辺のスケッチを小さな物語にし、表現する現場（劇場）を体験することにした。

このことは（自分たちの）劇場へ近づこうとする行為であると同時に、お互いのグループの試作を見ること・批評することでもありました。さらに出会った事柄の物語化が、思いの外この今という時代の矛盾や違和感を指摘する結果となり、小さな「表現」を通してこの世界・現実を見直す契機となったことも面白かった。（加藤直）

● 講義概要

近代、現代劇の側面から芝居を作るということを考える。

第一回

嘘をまぜて自己紹介をし、皆でどこが嘘だったかを言い当てる。自分の事、他人の事を改めて考えた。

第二回

役者は伝えたい感情を、言葉だけでなく、いかに身体を使って表現するかも重要だが、人形の場合はどうか。人形と役者の違いを話し合う。後半は「他者とのかかわり」をテーマにそれぞれ自身の体験を発表し合った。

第三回

赤い鳥運動の詩を朗読する。詩は読み手によって解釈が変わって聞こえるのが面白い。好きな詩を選んで、前回発表し合った「他者とのかかわり」の話と組み合わせ、2 グループに分かれて創作劇のシナリオを作った。

第四回

前回の授業で作ったシナリオをもとに寸劇の打ち合わせを行う。「空間の使い方」と「説明的でない芝居」を意識するように指導があった。

第五回

近代の劇場のあり方や、リアリズムとは何かについてお話を伺う。後半は打ち合わせとリハーサルの後、寸劇を発表しあい、終了後、講評をいただいた。



特別講義 人形芝居概要 (2コマ)

講師：田中純 先生

● 講義を終えて

人形芝居は何処から来たのか、ということから始めて、何故人形を遣うのか、何故人形遣いなのか、という問いを設定して、色々なことをお話させて頂いた。皆さんがどのような事を知りたいのか、求めているのか探りながらの授業で、少々難しすぎたかとも思った。人形遣いである私は、時間や呼吸、遣い手の意思やその他について、このように考えている、ということをお伝えしたが、人形遣いを目指すみなさんはどう受け取っただろうか。是非自分自身の答えを見つけ出して行ってほしいと感じている。(田中純)

● 講義概要

『人形が動くとはどういうことなのか』をテーマに人形芝居の歴史を学ぶ

第一回【人形芝居はどこから来たのか】

九州の古表神社で現在も見ることが出来る木彫り人形による神様の相撲や舞のように、元来人形とは宗教的・呪術的存在であり、人々は神の力や魂、そして神の訪れを受け入れるために人形を形代としてつかっていたという人形の起源から、元禄時代の近松門左衛門の登場以降、宗教性ではなくより現実的で生々し人間同士の物語によって人々の心を揺さぶっていく人形芝居の変遷を、時代を追って解説して頂いた。

また折口信夫の研究による沖縄の翁や、人形を使った神おろしの様々な具体例、三番叟の反問、後に人形浄瑠璃にも引き継がれる照手姫の車引きによる小栗の蘇生、能と歌舞伎と人形浄瑠璃の死と蘇生の表現の違いなど幅広い知識を教えて頂いたことによって、古代より現代へと脈々と連なって来た人形芝居の変遷の理由を学ぶ事が出来た。

第二回【なぜ人形を遣うのか、なぜ人形遣いなのか】

元禄時代に入り、町人文化が豊かになると神仏の利益よりも、がんじがらめになった人間同士の物語にリアリティを感じるようになる。人形遣いたちもまた、物語のイメージを越えようと人形の動きに工夫をこらし始めたが、では『人形が動く』ということはどういうことなのか。という主題をもとに、実際に三番叟の人形を操って頂きながらの講義となった。

さらに先生が人形を遣う上で基本とされている、人形の動きとは動かないところにひそんでいるもの、人形遣いの仕事とは時間を表現することである、手遣いの人形とは違い、糸あやつり人形の時間は糸の長さによって異なり、人形を操る人形遣いの時間とは呼吸である、という、今すぐには実感出来ずとも人形を遣う上での重要なお話を伺う事も出来た。

最後は塾生からも人形を遣う上での具体的な疑問や古い人形の仕組みなど活発に質問の声が上がリ、人形実技の授業にも繋がる大切な時間となった。



受講生のアンケートより

人形実技の講座について

- ・とても丁寧に分かりやすく、分からないところは何度でも根気良く教えて頂けたので良かったです。(40代女性)
- ・最後、発表会まであっという間。分からない事、出来ない事だらけで大変でしたが楽しかったです。基本的な動きを多くやり、まだまだ思うようには出来ませんが、色々な動きのパターンを発表会の稽古までにもう少し出来たらと思いました。(50代女性)
- ・足踏み、足踏み前進から始まって、飛んだり、歩いたり、正座、お辞儀等の動作に加えて、テーマを頂いて自分なりに人形を使って演じてみるまで幅広く教えて頂きました。(50代女性)

外部講師の方による特別講座について

- ・回数が少ないので、何かをわかるまでには到達できないが、それぞれの講義を通して、人形とどう結び付けられるかを考えさせられた。講師の方々の物事に対する姿勢や視点の定め方を知ることが出来、芸能の分野は違えど参考になる部分が多かった。(20代女性)
- ・講師の方の話など、理解力が足りなかったり、踊りなど上手にはできませんでしたが、自分の視野が広まりよかったですと思います。(60代女性)
- ・お能の授業では最後に私達のたどたどしい拙い謡で先生が舞ってくださり、感動致しました。(50代女性)
- ・とても丁寧に教えて下さり、プロの方々の精神に触れることが出来ました。どの授業ももう少しやりたかったです。

講座の曜日、時間帯、回数などについて

- ・最初、週3回は多いかなと思いましたが、手の感覚や教えて頂いたことを忘れないうちに次の回が来るのでちょうど良かったです。(40代女性)
- ・週3回と贅沢な授業でした。土曜日2回続けての授業で集中して行う事が出来ました。(50代女性)
- ・お休みが続くと折角少しは出来るようになったかも・・・と思ったことを忘れてしまったりと、週3日、コンスタントに稽古を続けることの大切さを実感しています。発表会前の連日稽古は、仕事を終えた後、毎日通うのは厳しかったです、今日こそ一歩でも前に行こう！と必死になりました。(50代女性)

入門塾全体について

- ・個人的には鳴物に興味があり、あやつり人形の鳴物をやってみたいです。(60代女性)
- ・実際の人形を使わせて頂くことに加えて、結城座公演の見学や、先生方の稽古の様子の見学などさせて頂き、すごくためになりました。(40代女性)
- ・最近2、3年、日本の古き良きもの、精神的な事に興味があり、あやつり人形もやってみたいと思っていたので、今回参加させていただきありがとうございました。思っていた以上に難しく大変ですが、おそらく、すばらしい伝統人形劇をまだまだ教えていただけたら嬉しいです。(50代女性)
- ・卒業公演で先代萩と聞いたときはドキドキとしてうれしかった。実際に公演を終えて、孫三郎さんは「ツライ演目をやらせた」というような言葉だったけれど、演じているコチラ側としてはとても楽しかったと思う。稽古のときの孫三郎さんの言葉、実演を通して、孫三郎さんが人形を遣っているときの頭の中が少し見えた気がして、「難しい演目」をやった分、得をする経験ができた。(20代女性)

人形実技の講義を終えて

毎年、卒業公演を何にしようか……頭を悩まします。生徒全員に良い役を、各自の技量、そして人数、さらに演目の役の数、その他諸々……ぎりぎりまで悩めます。

今年度は、結城座と縁の深い「伽羅先代萩^{めいぼくせんだいはぎ}—御殿^{ごてん}の場^ば」に決めました。この芝居は、プロの人形遣いがやっても大作です。発表をした時には、劇団員一同がビックリして、『とても無理だ』と反対されました。

私は元々、生徒達に私達プロと同じレベルの出来上がりを求めています。むしろ私は、プロの人形遣いがこの難しい演目に如何に向き合い、気持を込めて芝居を作っていくのか、そのプロセスを少しでも皆に体感して欲しかったのです。

稽古は、本読みからスタートしましたが、劇団員への指導と全く同レベルで生徒達へ伝達しました。その為、普段の稽古よりも厳しいものになりましたが、全員が弱音を吐かずによくついて来ました。何日も何日も、台本の一ページさえ進まない事が続き、彼らも、そして私自身もダメかなと感じる事も度々でした。

ついに本番当日です。舞台や玄関の掃除を終え本番ぎりぎり迄、緊迫した空気でした。なんと生徒達の芝居は、これ迄の稽古の時より一番良いもので、私にとって思わぬ喜びの中、幕を引くことが出来ました。稽古では、緊張のせいか上がってしまい人形の足の糸さえ忘れていた生徒が、ちゃんと歩いていました。お辞儀が上手く出来ない人、台詞の声の小さい人…そんな欠点が一杯ある生徒達一人一人が、本番ではとても良くなっていました。又、この卒業公演に参加の為、手術の日程調整までやり、直後に入院された生徒など、入門塾への熱い想いに心打たれました。

二十六年度生は、全員とてもがんばりました。

十二代目 結城孫三郎

今回の卒業公演は「伽羅先代萩—御殿の場」であった。女ばかりの、ほとんど大きな動きのない大変難しい演目に、皆必死に取り組んでいたように思う。しかし何が難しいのかを理解するには時間が短すぎたかもしれない。まず、人形の姿をキープする事が難しい。そして何より、悲しいときはエーンと泣いて、腹が立てばブンブンと怒り、おかしい時はアッハハと笑う、——これがない。日常の生活においてもこれは当たり前の事なのであるが、問題は感情の説明をせずに見ている人達に理解してもらうという事なのである。本当に難しい作品を皆よくがんばりました。皆が頑張っている姿を見ると、ああ今期も終わるのだなあと、一抹の淋しさを覚えます。一期一会とは云うものの、これからも共に時を過ごして行きたいと思ってしまうのです。塾生とは、弟子でも座員でもなく、とても楽しい仲間です。この期間が終わったとしても、いつまでも楽しい仲間であってほしいのです。

結城千恵



文化庁委託事業「平成 26 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」 

主催：文化庁

公益財団法人 江戸糸あやつり人形 結城座

国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」 「東京都無形文化財」

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 3-18-2

TEL 042-322-9750

FAX 042-322-3976

Email info@youkiza.jp

<http://www.youkiza.jp/>

協賛：東レ株式会社

印刷：社会福祉法人 東村山けやき会 平成の里

結城庵

